



TITLE:

京大広報 No. 268

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 268. 京大広報 1984, 268: 471-474

ISSUE DATE:

1984-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209418>

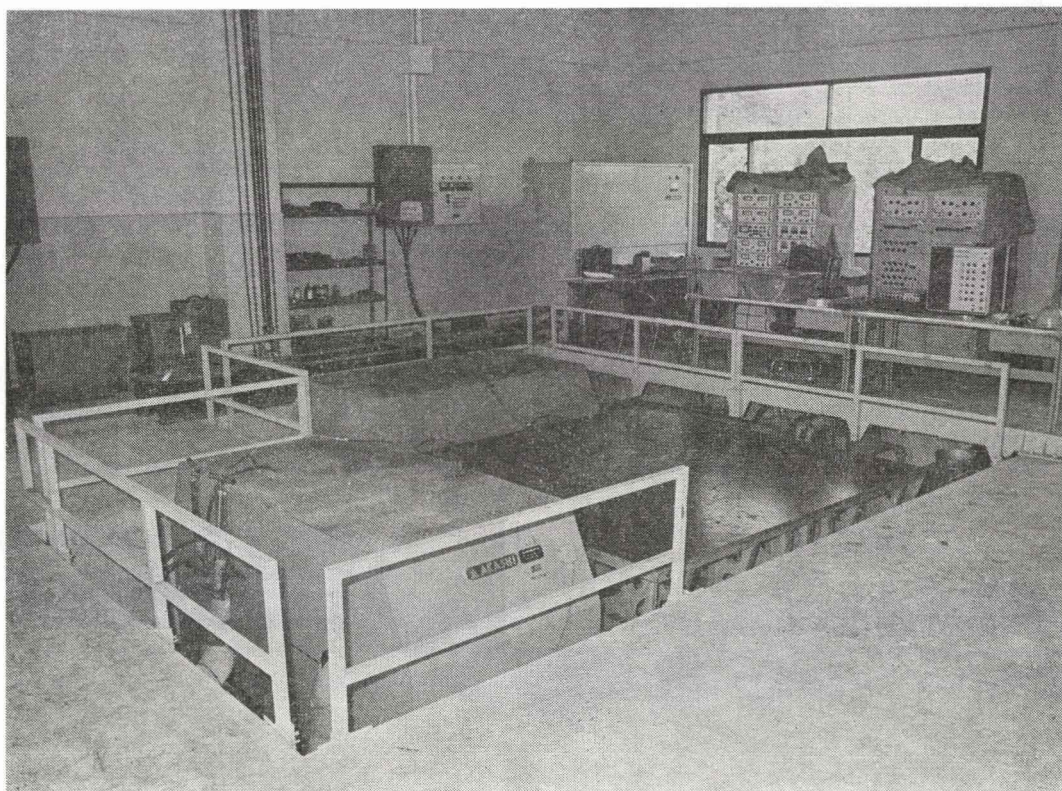
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 268

京都大学広報委員会



耐震試験用水平2方向動電型振動台（テーブル寸法 250 cm×250 cm）

——関連記事本文 472 ページ——

## 目 次

昭和59年度入学志願者状況等	472
昭和59年度医療技術短期大学部	
入学志願者状況	472
＜紹介＞	
防災研究所における耐震研究	472

計 報	473
＜随想＞	
寒中雑感	
名誉教授 上尾庄次郎	474



## &lt;大学の動き&gt;

## 昭和59年度入学志願者状況等

昭和59年度入学試験（第2次学力検査）は、3月4日（日）と5日（月）の両日に実施されるが、2月9日（木）から15日（水）まで、各学部において志願票の受付が行われた。法学部と理学部は、2月20日（月）に第1段階選抜の合格者を発表した。

学部別の入学志願者数と第1段階選抜合格者数は、次表のとおりである。

学 部	募集人員	志願者数	倍 率	第1段階選抜合格者数
文 学 部	200人	730人	3.7	—人
教育学部	50	134	2.7	—
法 学 部	350	738	2.1	737
経済学部	210	820	3.9	—
理 学 部	281	972	3.5	970
医 学 部	120	377	3.1	—
薬 学 部	80	155	1.9	—
工 学 部	945	1,965	2.1	—
農 学 部	300	770	2.6	—
計	2,536	6,661	2.6	

（注）表中の法学部と経済学部の募集人員には、外国学校出身者に対して、すでに実施された選考試験の合格者15名と5名とがそれぞれ含まれ、また両学部の志願者数には、同選考試験志願者37名と14名とがそれぞれ含まれている。

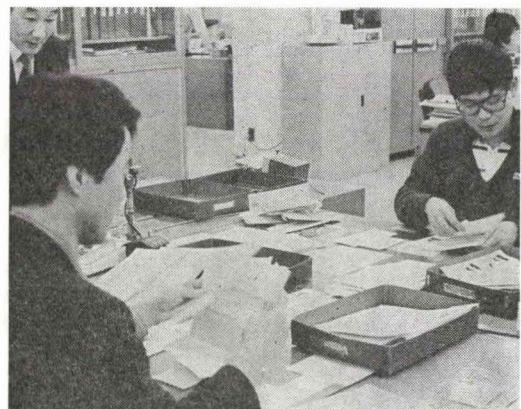
昭和59年度医療技術短期大学部  
入学志願者状況

昭和59年度医療技術短期大学部入学試験は、3月4日（日）と5日（月）の両日に実施されるが、入学願書の受理が2月1日（水）から8日（水）まで行われた。

学科別の入学志願者数は、次表のとおりである。

学 科	募集人員	志願者数	倍 率
看 護 学 科	80人	174人	2.2
衛 生 技 術 学 科	40	200	5.0
理 学 療 法 学 科	20	125	6.3
作 業 療 法 学 科	20	90	4.5

（医療技術短期大学部）



## &lt;紹 介&gt;

## 防災研究所における耐震研究

防災研究所には19研究部門、12附属研究施設及び2附属研究センターがあり、いずれも自然災害に関する研究を行っている。このうち、地震に関連するのは8研究部門であり、3つの研究部門が地震予知の研究を行っており、次の5研究部門で耐震に関わる研究を推進している。

地震動研究部門

地盤震害研究部門

耐震基礎研究部門

塑性構造耐震研究部門

## 脆性構造耐震研究部門

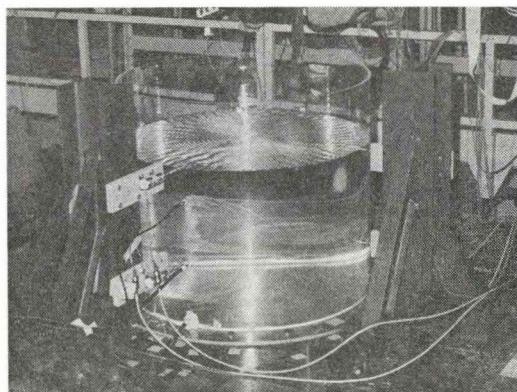
地震動研究部門は地震学と耐震工学の間をつなぐ研究を行っており、地震学の成果に基づいて構造物や施設の耐震性を論ずる際に必要となる地震動について研究を進めている。大地震後の余震の記録波形を用いて本震の観測波形を再現することにも成功しており、これを発展させることにより、事前の微小地震を観測しておけば、将来の大地震による地動を予測することも可能となる。

地盤震害研究部門と耐震基礎研究部門ではともに地盤と構造物の動的相互作用に関する研究を行っているが、地盤震害研究部門は地震による地動

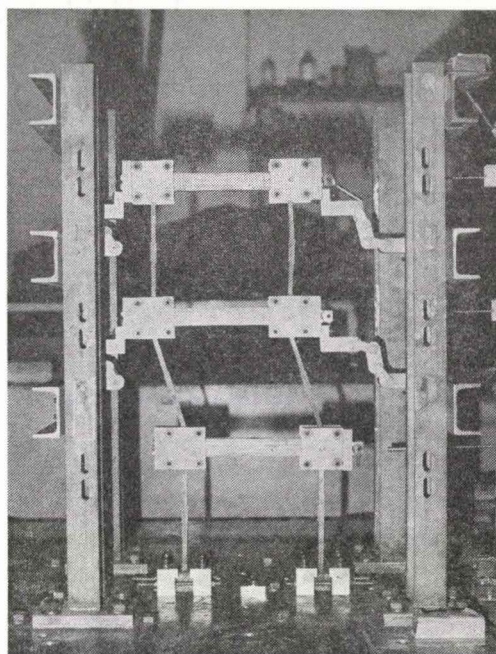
を非定常な確率過程とみなして、これが作用するときの構造物の非線形挙動についての高度な理論解析を展開している。耐震基礎研究部門は上述の動的相互作用に関して、特に構造物と地盤との接触面での強い非線形挙動を考慮した耐震解析法の開発に取り組んでいる。また、ライフライン系（水、エネルギー、交通、情報などの供給・伝達システムを総称する。）の地震時における信頼性の解析とそれに関わる地震動特性の把握についての研究を推進している。

脆性構造耐震研究部門と塑性構造耐震研究部門はいずれも、構造物が地震力を受けたときの復元力特性に関する研究を主要な研究課題としている。すなわち、鉄骨構造、鉄筋コンクリート構造、鉄骨鉄筋コンクリート構造などの代表的な構造物における動的な地震力と変形・耐力の関係を、静的・動的载荷装置を用いて詳細に研究している。また、コンクリートや鋼材などの材料の性質、柱や梁、壁などの構成要素並びに構造物全体としての挙動についても同様な検討を行い、これらを総合して建築構造物の合理的な耐震設計法の確立を目指している。

以上のように、構造物や各種施設の耐震性の問



振動実験、円筒タンク模型（直径 100 cm, 高さ 70 cm）によりスロッシング、バルジング、動水圧など液体・容器の動特性と耐震性を調べる。



振動実験、3層鋼構造物模型（支柱の高さ 85 cm, 幅 50 cm）では強度の小さい2層目に塑性変形が集中する。

題には多くの要因が関わっているが、本研究所の各研究部門はそれぞれ独立して、あるいは相互に協力して研究を進めてきた。わが国のこれまでの耐震技術の発展には目覚ましいものがあり、個々の構造物の地震時挙動の解明と耐震設計法は大きく進展した。一方、都市への人口・資産の集中化と各種の都市施設への依存度が高まった結果、それらが被災した場合の都市機能の低下並びに生活維持の困難などの新しい災害の発生が予想される。このような災害に対処するためには、都市を1つのシステムとみなして、その機能低下を最小にする方法を見出さなければならない。このような新しい研究分野をより進展させ、都市全体の耐震安全性を向上させるために、都市災害について総合的な研究を進めるためのセンターの設置を考えている。

（防災研究所）

## 計 報

高場 漢（医学部附属病院管理課第二調度掛物品主任）

2月13日逝去、47歳。昭和55年 医学部附属病院管理課調度掛物品主任。

